



市民による 8・6 広島宣言

きょう私たちは、特別な思いを持って、ここ相生橋上流の河畔に集まっています。さきほどまで私たちは、福島県浪江町の馬場有町長の決意を伺うとともに、広島に避難されている人たちの訴えに耳を傾けてきました。そして灯ろうが流れるこの岸辺に集まり、あらためて福島と広島の訴えを聞きました。避難者と被爆者と市民、そして被災地の町長……。そこで語られたのは、歴史上最悪の原発事故を経験した私たちは、これからも原発とともに暮らすのか、子や孫たちとともに原発のない社会を築いていくのか、その岐路に立っているという強い思いです。

福島原発事故では、多くの人たちが、かけがえのないふるさとを失いました。家族を、仕事を、人生を奪われました。避難した人だけでなく、不安を抱えながらふるさとに残ることを決めた人も、みな同じ被害者です。そのことは、67年前のきょう、原子爆弾によって悲惨な被害を受けた、広島・長崎の被爆者がよく知っています。放射線の被害に苦しめられ続けているヒバクシャは、どこでどのように被ばくしても、また今どこにいても、ヒバクシャなのです。国や東京電力の不当な線引きなどによって分断されてはなりません。

私たちがいま決断しなくてはいけないのは、原発をきっぱりなくしていくのか、将来にわたって事故の危険を負いながらこれまで通り動かしていくのか、その選択です。政府は事故原因が究明されないままに再稼働を決めました。原発施設の真下に活断層がある可能性が指摘されても、考え直そうとさえしません。繰り広げられる官邸前や全国各地の原発なくせの国民の声に耳を貸さない政府の姿勢は民主国家と言えるのでしょうか。

「平和利用」の名のもとに原発を導入し推進してきた歴代政府は、核武装を真剣に考え、常にその可能性を追求してきました。福島原発事故の後にも、「原発は核抑止力だ。原発を放棄するのはもってのほかだ」という政治家の発言もありました。そして原子力基本法に「安全保障に資する」を潜り込ませ、そのねらいをあきらかにしました。

私たちは、この流れといま正面から向き合っています。まさに正念場の時を迎えています。

私たちは、福島原発事故による避難者、原爆によっていまだに苦しんでいる被爆者、そして脱原発の志を持つ市民がこれからもともに手を携え、核兵器も原発もない社会を目指して今日からまた、歩み続けることを宣言します。

私たちは、広島原爆の日に世界に向かって叫びます。「原発も核兵器もなくそう！」と。

2012年8月6日

広島・相生橋上流にて 8・6 平和灯ろう集会参加者一同